

寫眞と思ひ出

——私の寫眞修行——

南部修太郎

青空文庫



寫眞も、この頃は猫も杓子もやるといふ風な、はやり物になつて、それに趣味を持つなど、いふのが變に當たり前過ぎる感じで、却て氣がひけるやうなことにさへなつてしまつた。が、いつだつたか、或る雜誌にのつてゐたゴシツプによると、文藝の士の余技の内玉突と寫眞とでは私が筆頭ださうだ。

無論、そんなことで筆頭など、認められても、格別嬉しくもないが、そもく私が寫眞を初めたのは、十二の時分のとで、年號にすれば、明治三十五年、流行物どころかしらうと

に寫眞など寫せるものではないといふやうな考へのある時代だつた。

ところで、どういふ譯で、そんな子供の私が寫眞などはじめるやうになつたかといへば、その頃私は、三宅克巳氏著の「少年寫眞術」なる一書を手に入れたのだ。それは、子供向きに寫眞の沿革から撮影、現像、焼付の法、それに簡単な暗箱の作り方までを説明してある。たしか博文館發行の少年理科叢書の一冊だつたかと思ふ。それを讀むことによつて、私は寫眞に對する子供らしい好奇心と興味とを大に刺戟されたのであつた。



当時、私の一家は長崎に住んでゐた。その長崎には、下岡蓮杖
 翁と並んで、日本寫眞界の元祖である上野彦馬翁が同じく住ん
 でゐた。これは偶然「少年寫眞術」の沿革史の一節にも
 書いてあることだつたが、うちで寫眞を寫すといふと、いつも
 その上野寫眞館へ出かけたもので、その頃翁は直接撮
 影場に出るといふやうなことはなかつたが、頭のすつかり銀
 髪になつた、額の廣い、あごの角張つた翁の顔を、この人が寫
 眞の元祖だといふ風な一種の敬意を以て眺めたことが、うつ
 すりと私の記憶に残つてゐる。——が、さて、その一書によつて

深く寫眞熱をあふられた私は、何よりも寫眞機がほしくてたまらない。母はもとより私の望みなら先づ大概は聞いてもらへた。祖父母にも盛んにせがんで見たが、

「子供に寫眞など寫せるものではない」

そんなことで、到底相手にされなかつた。それに子供だましの寫眞器の二三円でも、當時では、可なりの贅澤品に違ひなかつたし、然るべき寫眞器など、無論買つてもらへるはずもなかつた。



仕方なくそれは諦めたが、その頃から割合に手先の器用な私
 だつたので、「少年寫眞術」の説明に従つて、私はとう／＼
 寫眞器自作を志した。

薄板を組合せて名刺形の暗箱をこしらへる。内部を墨で
 塗る。眼鏡屋から十五錢ばかりで然るべき焦點距離を持つ虫眼
 鏡を買つて來て竹筒にはめ込んだのを、一方の面にとりつける。
 それに蓋をつける。最も苦心したのは、乾板を入れる装置の處だ
 つたが、とに角一週間ほどの素晴らしい苦心で、それが、どう
 にか出來上つた。

それから或る日、町中を探し歩いてやつと見つけたのが、藥
 屋が主の寫眞材料店、名刺形の乾板の半ダース、現像液

に定着液、皿、赤色燈、それだけは懇願の末、祖母から資金を貰つたのだつたが、胸を躍らせながら、押入へもぐり込んで乾板を装置して、庭の景色などを寫してみた一枚、二枚、三枚。しかし、夜を待つて、また押入の中での現像の結果は、乾板の黄色い面がまつ黒になつてしまふばかり。とう／＼二ダースの乾板を無駄にしたが、影像は全く膜面に現れて來なかつた。「そおれ御覽なさい……」

といふ母や祖父母の聲、不平はモデルにした妹達や女中までから來た。私はすっかり、しよげた。資金ねだりにも、祖母は、さう／＼顔は見せなくなつた。が、根が負ず嫌ひでもあつたし、またさうなると、今までの苦心努力の報いられなかつた悔しさか

ら、せいこう 成功への要求ようきうが逆ぎやくに強つよくなつた。そして、さつえいほう 撮影法にも、げんぞうほう 現像法にも、むろん 無論手製せいの装置そうちにも改かい善ぜんを加くはへて更さらに何枚まいかをこころ 試こころみたが、あゝ、それは何といふ狂喜けうきだつたか？



或る日の午後ご縁側えんがはに坐すわらせた學校友達たちの一人を寫うつしてみた乾かん板つひに遂つひにうつすとそれらしい影えい像ぞうが現あられた。押入おしの暗くら闇がりで赤色燈とうに現像皿げんぞうさらをかざしてみながら、いかに私わたしは歡喜くわんきの笑わらみを浮うかべたことであらうか？それからけふまでもう二十余年よ、私わたしの長い寫真物しゃしんもの語かたりのペエジにも悲喜ひきこも／＼の出來事くりが繰くり

返されたが、あの刹那にまさる嬉しさがもう再びあらうとは思へない。



その後間もない十二年の歳の秋に、私は三つ時分からの持病の喘息に新しい療法が発見されたといふので、母と共にはる／＼上京したが、その時三月近く滞在してゐた母の實家で若い叔父が寫眞をやつてゐた。それは今から思へば、七八円程の安價な組立寫眞器だつたが、それを見、また景色にしる人物にしろ相當立派に寫し出されてゐるPOP印畫を眺めた時、私は嫉妬

に近い羨ましさを感じ、かつはどれほど寫眞熱を刺戟されたか
 分らなかつた。そして叔父からいろいろ教へを受けると同時に、
 いよ／＼長崎へ歸るといふ時に、さん／＼母にせびつて漸く買
 つてもらつたのが二円五十錢の、至極簡單ながら速寫裝置もあ
 る箱形の輕便寫眞器だつた。その買った店といふのが、新橋
 の博品館の隣の今は帽子屋になつてゐる雜貨店で、狭い銀
 座通にはまだ鐵道馬車が通ひ、新橋品川間が電車になつたば
 かりの頃だつた。本石町の小西と淺沼、今川小路の進々堂――
 それらが當時の有名な店だつたが、とにかく東京にも寫眞器屋な
 どはまだ數へるほどしかなかつたやうに思ふ。



三十八年の春はるに一家が東京けうへ住すみ移うつるやうになつてから、やがて二度目どに買つてもらつたのが、前のにちよつと毛けのはたくらゐの五円ばかりの箱形寫眞器はこかたしやしんき、少し寫眞しやしんのすこが分りかけて來た私わたしにはとても不ふ満まんでたまらない程度ていどのものだつた。そして、いゝ寫眞器しやしんきに對たいする憧憬たいは日に日に高まるばかりだつたが、さう手易やすく買つてもらへる筈はずのものでもなかつた。

で、仕方なく小西、淺沼あさぬま、進々堂しんどうあたりから寫眞器しやしんきの目録ろくを取りよせたりして、いはば高根ねの花のいゝ寫眞器しやしんきの挿繪ゑや説せ明つめいなどを讀よむことによつて、氣持きを慰なぐさめてゐた。プレモ、オ

オトシヤツタア、ソルントンシヤツタア、フオルカルプレシヤツタア、カアルツアイス、百分の一、千分の一、テツサア、アナスチグマツト——さういふ寫眞用語がいかに歴亂として私の腦裡を動き、いかに胸躍るやうな空想を描かせ、いかに儂ない慰樂を與へたことか？

「さうだ貯金をしよう、貯金を……」

或る日、私はそれ等の目録を眺めながら、せめて百分の一秒ぐらゐまでのシヤツタア装置のある三四十円の寫眞器を買はうと思ひ立つて、さう心をきめた。そして、月々きまつてもらふお小遣ひを少しづつ郵便貯金にし初め、いつも祖母がくれるお中元お歳暮の金も今までのやうに無駄には使はないことにした。



その貯金ちよが二十円あまりになつた中學二年生の夏なつ、それと同額がく
 ぐらゐの足し前そを祖母そにせがんで漸やうやく理想りそに近い寫眞器しやしんきを買つ
 たそれは可成かなり明あかるいアナスチグマツトレンズに百分の一秒べうまで
 利りくオオトシヤツタア装置そうちを持つプレモ形かたの二枚掛まいかけ寫眞器しやしんきで、
 その取とり框かどに中框ちゅうかどを使つかつて大概がい手札乾板てだかんばかりで寫してゐたが、處しよ
 女撮さつえい影かげから寫る寫る、立派りつぱに寫る。五段伸だんの三脚きやくの上うへに立たて、
 黒布くろぬのをかぶりながら焦點せうてんを合あはせる時ときの私わたしの満足まんじつと嬉うれしさ、と
 また誇ほこらしさとはいひやうもなかつた。そして、家いへの中ちゆうでの人物ぶつ

撮影さつえいは、いふまでもなく日曜日ようには可成りかな重いおもその鞆たもとをかついで郊外こうぐわいへ撮影さつえいに行く。

旅行りよの時ときにはもう戀人こひのやうな伴侶はんりよで、撮影さつえい、現像げんぞう、焼き付やつけき付つけの技ぎ量りょうも自然しぜんと巧たくまくなつて、學校がっこうでの展覧會てんらんくわいでは得意とくいな出品物ひんぶつであり、常陸ひたちの海岸がんで朝鰹あさかつをふね船ふねの出いかけを寫うつした印畫いんぐわを或る専門家せんもんに見みせた時ときには、どうしてもそれが中學三年生ちゅうがくさんねんせいの素人しらである私わたしの撮影さつえい、現像げんぞう、焼き付やつけにかゝるといふことを信しんじてもらへなかつた。



三田の文科生になつてからは、さすがに寫眞熱もさめてしまつたが、旅行の時だけは、もう可なり古びた上に舊式になつたその寫眞器を相變らず伴侶にしてゐた。手慣れてゐるばかりでなく、割によく寫る寫眞器で、一ダースが一ダース、めつたに失敗もないといふやうなことが、買ふまでの苦心の思ひ出と相俟つて、それは私に長い愛着を持たせてゐたのである。が、大正九年の秋、たま／＼ヨーロッパから歸つて來た親戚の人からイーストマンの葉書判の寫眞器をみやげにもらつた。それは装置が新しく便利だといふ以外には、所持のプレモと大して變りもないものだつたが、大正十一年の支那旅行の時には、それを肩にして行つた。ところが、支那では税がかゝらないので、知り合

自在留^{ざいりう}日本人^{たち}達は、みんな立派^{りつぱ}な器械^{きがい}を持つてゐる。いつもその
 點^{てん}では氣^きがひけたが、印^{いんぐわ}畫^わを見せてもらふと安心^{あん}した。撮^{さつえ}
 影^いの技量^{ぎれう}では自分^じが露骨^{ろこつ}にうまいなど思^{おも}はせられたからである。
 しかし、やがて贈^{おく}り主^{ぬし}の悲^{かな}しき形^{かた}見^みになつたその寫真^{しゃしん}器^きは、
 支那^{しな}の旅^{りょ}から歸^{かへ}ると間^まもなく、或^{ある}る文學^{ぶん}青年^{せいねん}の詐欺^{さぎ}にかゝつてう
 しなはれた。最近^{さい}廣津^{くわつ}和郎^{わらう}氏が「さまよへる琉球^{りゅうきう}人^{じん}」といふ作^{さく}
 の主人^{しゆじん}公^{こう}にした青年^{せいねん}がどうもその青年^{せいねん}と同一^{どういつ}人^{じん}らしいので、私^{わたし}は
 ちよつと驚^{おどろ}いてゐる。



中學時分に買った寫眞器も、その少し以前或る寫眞好きの友達に贈つてしまつたので、それ以來暫く私の手元には寫眞器の影がなくなつてしまつたがその翌年のこと、私は偶然ある人から、やゝ身にあまるやうなのを譲り受けることが出來た。英國製で、シイ・テツサア四・五鏡玉、千百六十分の一秒まで利くシヤツタア付の、手札形フレックス、素人用としては殆どこの上ないものといつて差支へないのだが、それで一時盛返した熱も今は又すっかりさめきつて、それは空しく押入の奥でほこりにまみれてゐる。

あの手製の暗箱をこしらへた頃、毎日目録を眺めては楽しんでゐた頃、汽車の疾走などを大騒ぎで寫して喜んでゐた頃、そ

れらをおもひ返すと、私の胸には何かしら變な寂しさが湧いてくる。假かりに今のレフレックスのやうなのが、そのころの私わたしに授けられてゐたとしたら？



しかし、いろく合あせて、もう千余枚よまいを數へる印畫いんぐわのアルバムをりくりながを時折繰眺めるのは、樂たのしく愉快ゆくわいである。そこには私わたし及び私わたしの周圍しういをなした人達たちや旅の風景けいなどの過去くわこの一面々々めんが、あざやかに記録きろくされてゐる。

一體たわたし私は、この頃流行ころけうのいはゆる藝術げいじゆつ寫真しやしんには、何なんの感かん

興うも持たない。あの變へんに氣取きとつた、いかにも思おもはせ振ぶりな、しかも一種しゆの型かたにはまつた印畫いんぐわのところがいゝといふのであらう？

要ようするに、寫眞しやしんの本領れうは、興味けうみはさういふ意味いみの記録きろくを、いひ換かへれば、過去くわこを再現さいげんして、思おもひ出だの樂たのしさや回くわい想そうの懷わかしさを與あたへるところにある。そして、印畫いんぐわの價値かや面白おも味みは、遂つひにそれ以上いじやうに出るものではないと私わたしは思おもふ。

青空文庫情報

底本：「サンデー毎日」大阪毎日新聞社

1926（大正15）年6月27日発行

初出：「サンデー毎日」大阪毎日新聞社

1926（大正15）年6月27日発行

※つづれ、かすれでルビの濁点、半濁点の有無を判定できないところがありました。訂正注記、ママ注記することは避けて、見えた通りに入力しました。

※「変体仮名え」は、「江」をくずした形です。

※「変体仮名え」と「こと」の外字注記中の数字は、「ページ」

段数・行数」です。

入力：小林 徹、小林 誠

校正：富田倫生

2011年5月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

寫眞と思ひ出

——私の寫眞修行——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 南部修太郎
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>